



かき

福岡県うきは市 西見和久さん

ローテーションの最後に使用。ここぞというとき、カメムシに効くから。

西村早生の出荷が近づく8月の終わりに、JAにじ柿部会の部会長を務める西見和久さんの園地におじゃましました。西見さんは、4.5haの園地を管理。冬季の剪定と土づくりがこだわりのポイントです。

「枝が混みすぎても、空間が空きすぎてもいけないし、5～6年後の枝の状況を想像して剪定をするんだ。ここを切ると数年後にはこんな樹になるな、というイメージを目に浮かべながらね」。

土づくりは1年では結果が出ないので、味や玉太りのために、堆肥、元肥、追肥の施肥体系は毎年欠かさないと言います。

品質管理のために、もちろん病虫害防除にも余念がありません。特に、重要害虫チャバネアオカメムシは、8月のお盆前後に山のヒノキ林から、かきの園地に群れで移動してくるのだとか。

西見さんは10年以上前からアグロスリン水和剤を愛用。収穫開始の前日に1000倍液を10aあたり250ℓ散布するのが定番です。

「どの品種にもローテーションの一番最後にアグロスリン水和剤を使ってるよ。それ以降の収穫期間は基本的に防除しないから、ここでカメムシに効いてくれないと困る。でもね、アグロスリン水和剤はカメムシにすごく効くんだ。しかも速い。散布してる途中でも、スピードスプレーヤーの上に落ちて死んでるのが見えるから安心なんだよね。収穫前日まで使えるのも便利だし」。

今後は、福岡県が開発した世界初の種なし甘柿品種「秋王」の面積を増やし、いちじくやぶどうとの複合経営も展開したい、と抱負を語ってくださいました。

西見さんのかき防除カレンダー

